
「懲役782年を言い渡す。」

遊崎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「懲役782年を言い渡す。」

【Nコード】

N2898K

【作者名】

遊崎

【あらすじ】

懲役782年。

それが僕に言い渡された判決。

でもそのまま従うんじゃないね・・・

最期に何をみせつけてやろうか？

僕は人を殺した。

何人も何人も殺した。

後悔はしていないよ。

だって君を守れたから。

「懲役782年を言い渡す。」

それが僕への判決。

否、僕と君への判決。

「執行猶予は無いんでしょう？」

僕は訊いた。

裁判長は少し驚いたようにして、

「ああ、無い。」と言った。

そして少し間を置いて、

なにか思い残すことは無いか、と訊いた。

「なんでもいいですか？」

「そうだ。なんでも叶えてやる。」

僕は口元を歪めて言った。

「じゃあ、彼女に会わせて下さい。」

裁判所がざわつくのがわかった。

「え、駄目ですか？」

「・・・許可する。」

連れて行け、と言われて僕は居住まいを正した。
そして笑って言う。

「生きていてすみません！」

傍聴席の方から、非難の声が聞こえる。

大音量の罵声のシャワー。

僕は恨まれる。彼女のために、僕のために。

この国には死刑というものが存在しない。

憲法上のものなのか、宗教上のもののかはわからないけれど、と
りあえず死刑は無い。

だから、僕みたいに懲役782年とかいうあり得ない数字が下され
るわけである。

ちなみに、終身刑は存在する。

ならばなぜ懲役782年みたいなことになるのか。

この国では、期間を終えるまで独房を出ることは決して許されない。

それは、つまり。

死んで、死体になっても782年が経つまで埋葬ができない。

これほど惨いものはないのだろう。

別に僕は気にしないけど。

どうせ出れないし、改心するつもりもない。

一種の嫌がらせなのかな、これは。

そうこうしていると彼女の下へ着いた。

「やあ、久しぶり」

「ひさし、ぶり。」

少し痩せただろうか。隈も出来ている。

「ちゃんと寝てる？」

「うつん、あんまり。」

弱々しい笑みを浮かべる彼女。

「駄目だろ、ちゃんと寝ないと。」

すみませんが、少しの間二人にしてくれませんか？」

警察の人は無言で部屋を出て行った。

「君が気に病む必要はないんだよ？全部僕がやったことだ。」

「違うわ！」

「違わない。僕が君を守らんと使命錯誤して暴走した結果がこれ。そうだろう？と同意を求める。」

「で、でも・・・」

「いいんだ、君が幸せでいてくれるなら」

「ありがとう・・・」

彼女は泣きながら僕にしがみ付いてくる。

僕は彼女をあやす様に抱きしめる。

彼女を庇って僕は捕まった。

彼女は僕の前で母親を殺した。

それは何故なのか。

そして、何故僕だけが犯人となっているのか。

彼女はいじめを受けていた。

壮絶ないじめだった。

机は破壊され、椅子も校庭に投げ出され、彼女の席とは名ばかりの床だった。

学校へ来ようものならスプレー缶で体中に落書きされる。
教師は叱りもしなかった。見て見ぬふりをしていた。

彼女の家は母子家庭だった。

ある日僕が彼女の家へ向かうと、彼女は母親から虐待を受けていた。
両頬は腫れあがり、腕からは血を流していた。

そして彼女は、すぐそばにあった包丁で、その女を突き刺した――

それを隠滅するために僕は人を殺した。

彼女をいじめていたクラスメイト達を、彼女が受けていた仕打ちを
無視していた教師達を。

ついでに僕を捕まえに来た政府の犬も殺した。

まあ782年は妥当なのかもしれない。

僕が殺したのはざっと50人くらいだから。

そして僕はそれを受け入れ、謝罪はしない。

改心もしない。

悪いのは僕じゃない。

僕は正しくないけれど、僕は間違っていない。

正しくなくて間違っているのは、世界だ。

「今までありがとう。」

泣きやまない彼女に言った。

「うん・・・」

「これでさよならだけど・・・僕のことを、忘れないでね」

「あたりまえじゃない・・・」

僕は笑って別れた。

今生の別れ。

さあ、これからどうしようか。

笑いながら獄中生活を送るのも悪くないけれど、それだと政府に従っているように思える。

国会の前で自殺するのも悪くないなあ。

まあとりあえずはこの邪魔な奴らをぶち殺そう。

そして僕は足を振り上げた。

f i n . . . ?

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2898k/>

「懲役782年を言い渡す。」

2010年11月14日02時12分発行